



Title	アセスメントとカリキュラム・マネジメントによる林野高等学校の改革：汎用的な能力・資質の育成と評価
Author(s)	三浦, 隆志
Citation	Pages: 49-60
Issue Date	2019
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/86342
Type	proceedings
Note	北海道大学入試改革フォーラム2019. 2019年6月18日. 北海道大学学術交流会館(札幌). 北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部主催, 北海道大学アドミッションセンター共催
File Information	4_Miura.pdf



[Instructions for use](#)

現状報告3

「アセスメントとカリキュラム・マネジメントによる 林野高等学校の改革～汎用的な能力・資質の育成と評価～」

岡山県立林野高等学校 前校長

三浦隆志氏

(司会)

それでは、続いての報告です。「アセスメントとカリキュラム・マネジメントによる林野高等学校の改革～汎用的な能力・資質の育成と評価～」と題しまして、前岡山県立林野高等学校校長の三浦隆志様からご報告をいただきたいと思えます。よろしくお願いいたします。

(三浦)

皆さん、こんにちは。岡山からやってまいりました三浦でございます。今日は白井様の報告、池田先生、橋村先生の話を受けて高校の現状ということについて報告させていただきたいと思えます。自己紹介としては岡山県の公立学校の教員を長くしておりましたが、今年の3月31日で退職をしまして、今は無職の身でございます。在職中に一番大きかった仕事と申しますと、ちょうど今から20年ほど前、2001年から10年間、岡山操山という学校に勤務しておりました。ちょうど公立の併設型中高一貫を立ち上げるころから軌道に乗せる仕事を10年やりました。その後半、今から10年ほど前に現行の学習指導要領が策定される中でいわゆる評価をずっと研究しておりました。いわゆる「言語活動の充実」ということをキーワードにしながら、言語活動をどのように評価していけばいいのかということを中心に校内で研究をしていたチームの一人でした。そういう私がそのうち管理職になり、「資質・能力の育成と評価」を研究するとは思いませんでした。

当時岡山操山では300人の生徒がいましたが、300番の生徒でも国公立大学の推薦AOに通るケースがよくありました。それはどういうことか



というところが研究のスタートでした。そういう生徒にはどのような力が付いているのかが疑問のスタートでした。たまたま東京大学の荻谷剛彦さんに出会いまして、ご指導を受けました。いわゆるコンピテンシーの話です。私たちは社会力というキー概念を1つ作り、それで何年間か調査しましょうということ、東京大学と連携しました。現在でも東京大学はデータを取っていますが、社会力がどのような形、どの場面で付いていくのかを回帰分析等を通じて明らかにしていったのです。そのことが契機で今のようになっていったのだと思えます。

林野高校の話少しします。実は私は3年間林野高校でお世話になりました。この春から高等学校では「学びの基礎診断」と申します大がかりな公的なアセスメントの取り組みが始まりました。このアセスメントを実施するにあたって高校生の学力保障をどのようにすすめるかという文部科学省の実証研究を通じて学校改善を進めていきました。

それでは、林野高校は岡山県の地図では右上に

なります。なかなかイメージしにくいところですが、有名人と言えば宮本武蔵が出たところぐらいでしょうか。そこにある唯一の公立高校です。ここを見ていただくと分かりますが、中山間地域の学校で、定員を充足していない学校です。しかし、地元の人材育成を担っていますので、国公立大学の合格が学校のミッションの一つになっています。

今から8年ぐらい前に学校が困った時期がありました。そこで、学校改革を行いました。単位制に移行するとともに学校設定教科や科目を用意して、さまざまな教育プログラムを開発しました。特に文部科学省から表彰されたこととして、「総合的な学習の時間」をうまく機能させて生徒の学ぶ意欲を高める取り組みが著名です。ユネスコスクールの世界大会が岡山であったということもありまして、早くからグローバル人材の育成にも取り組んでおりました。近年では台湾の学校と姉妹校を結び交流を始めています。これも後で出てまいります。小さな学校ですので、ICT設備も整備していただき、生徒が1人1台でGoogleのChromebookというパソコンを持って授業に活用しています。

一番の課題はなんであったかといいますと、お手元にデータがあると思いますが、定員と入学者です。青いところは100%入ったところ。ちなみに今年度も0.83ということで定員に満たない状況でした。だいたい2009年あたりまでは大丈夫でしたが、2010年から危機的な状況におちいりました。ここにありますが、定員に対して70%という7割を切るという超危険な状態もありました。実はそこから学校改革がスタートしました。私がいたのがその残りの3年のところ。

私が校長になりました直後、教育委員会と教育長さんから具体的に「おまえの学校はどうするのか」ということで、実は若い先生方に集まってもらい、学校の現状をふまえて作成したポンチ絵がこれです。当時の先生方の発想からしますと、「こんなことをやっています、校長先生」というところで、いわゆる活動ベースのことは先生方はよく頭に入っています。ここに「豊かな心」とか「グ

ローバル」だとか、「知識を活用して新しい価値を生み出す」というところは見えるのですが、具体的に活動の部分と資質・能力のつながりが見えないのです。これをどうにかするしかないというところで、具体的なことが始まったわけです。それから、本日は公立高校の先生方が半分ぐらいおられますので、いわゆる校内でやっているテストと業者の模擬試験だとかアセスメント教材を割り振るとこういうことになります。高校生は結構忙しく生活をしています。さらに今年の9月にここに「学びの基礎診断」を入れます。さらに英語検定をどうするのかということを検討するときに作った表なのです。高校生は忙しいという状況がおわかりになると思います。

これは概念の話です。このように取組をしても課題としては生徒が集まらず、他地区へ流出しています。

さらに、先進的な取組をしていますが成果が十分ではないのです。実際に入学してくる生徒は真面目で、国立大学に半分以上は行きたいと言う生徒たちばかりです。当然北海道大学もきちんと視野に入っています。全国津々浦々に進学していきます。実際に今年、北見工大に行った生徒もいますので、全国に行くことに関して普通ですから、この辺りとうまく連動させて成果をあげるところが課題でした。それ故生徒にどういう力を付けるかを明らかにし、授業を中心として教育活動を改善して、さらに社会に開かれた取り組みを行って基礎学力の定着に向けた調査研究事業を梃子にして取組んできたわけです。

「学びの基礎診断」が今年から始まったということは先ほど申し上げましたが、新しいテストを導入するための調査・研究というわけではなくて、これまでの課題を克服して新たな未来を切り開く若者を育てるために取り組むということを私は連呼して言いました。ですから、どこかの業者テストを何回かやってテストの点が上がればよいという話ではないということを常に言ってきたのです。

これは去年の12月に京都でもお話をしました。このような二つの柱でやってきました。ちょうどこの部分です。「主体的に学ぶ力を育成する」とここに書きましたけれども、先生方のイメージでは生徒は自分で勉強しないとか、勉強し続けなという課題が何となくありましたが、つまり学校の課題としてほんやり見えていましたが、どうするかというところがなかなか見えていませんでした。いわゆる「どうするか」のエンジンがないということです。

もう一つは当時新しい学習指導要領の道筋がつき始めていましたから、その道筋を踏まえた上で、二つの取り組みを3年間で統合したいところが私の願いでした。この部分から話をしますと、授業改善の部分では先生方に少し評価ということを意識したような理論を少し勉強していただきました。といいますのも当時指導教諭をしていたある女性の教員から「先生、先生方に理論的に『問い』の研究をしていただくことで、授業改善が図れるのではないのでしょうか」と提案がありました。最終的には先ほどの橋村先生の話がありましたけれども、北大が求めているコンピテンシーのところと申し上げますと、このようなレベルにあるのだというところが「問い」に応じて生徒がどのような力を身につけることが出来たかを明らかにできますので、「いいでしょう」ということで研究をやっていたいただきました。

具体的な「問い」はプリントにはありませんが、「Ideas」に当たるところが知識の部分に当たるのでしょう。よく「関ヶ原の戦いが何年ですか」という問いに「1600年」と言いますが、実際に「1600年」というワードを答えるわけではなくて、1600年の後ろに隠されている意味的なものも含めての「Ideas」というレベルです。そして、その「Ideas」をうまく活用して「江戸幕府が260年間も続いた理由はどのようなことですか」ということを考えさせます。自分で考えるケースもあるでしょうし、グループになって探究活動していくこともあるかと思えます。

さらに「Extensions」という形で、「では今であっ

たらどうしますか」という問いです。このところに「もしも」という問いがここで「もしも、こういうことであれば、どういうことをあなたは考えますか」「どうしたらいいでしょうか」という具合です。日本史などの歴史で言いますと、「先生、それは間違いではないでしょうか」というご指摘があると思います。新学習指導要領では日本史探究のところでも明確にここまで書かれています。これは漢文のアイスルーブリックです。「鶏口となるも牛後となるなかれ」という有名なところですよ。

漢文の学習では文章を読んで意味を調べて意味をとらえることを主にします。ここでは、洞察を促す問いとして、「鶏口牛後」のことわざを出したねらいから、「鶏口牛後」という言葉を出す前にどのような話をするか、「鶏口牛後」の言葉の理解が進むかという「問い」が考えられます。さらには人に説得されて判断を迫られるということについて実社会において挙げられる例で何かあるかとさらに発展した「問い」が考えられます。当然意味を理解していなければいけませんし、実社会というところに言葉の意味の広がりがあるわけです。それ故に評価が段階的にできるということになります。

生徒が主体的に学ぶ力を育成する柱の二つ目はChromebookの導入です。Chromebookは5万円ほどの機械です。Googleが「G Suite for Education」というアプリを学校に用意してくれます。Excel、Word、Power Pointのようなアプリがあり、これらと互換性もあります。特にClassroomというアプリを使って文字、映像、音を事前に送って予習をさせることができます。授業中に問題を送ることができて、入力すれば共有することもできます。「フォーム」とはアンケートです。ミニテストです。これはすぐにできます。生徒の学び方も大きく変わりました。それから、リフレクションの部分で言いますと、山梨大学の堀哲夫先生の研究を援用しまして、「一枚ポートフォリオ」をたいがいの教科が導入しています。これは生物基礎のプリントですけども、学習する前ではこれ

ぐらいのことしか書けないのですが、学習後はこれぐらいのことがきちんと書けるようになります。これは表面ですけれども、裏面には一時間ごとに書かれています。それを授業の終わりに生徒に今日の授業で「なるほど」と思ったところを表現させ、授業後に教員がチェックをしているのです。どの教科も同じ形ではないのですが、工夫しながらやっています。

結果ですが、ベネッセのアセスメントでDゾーンが劇的に減っていきます。ただ、これだけではわれわれが求めているところにはないことが、この3年間やってきたことです。

これがHyPre-QUというアセスの中に学習方略を問う場面があります。学習方略の改善の部分が見えてくるところです。ですから、いろいろなアセスメントを組み合せながらやっていく苦しい部分もありますが、これが今は最良の評価指標です。

授業評価アンケートは先ほど言いましたが、「フォーム」というアプリで素早くやってしまいます。生徒が入力すればすぐに結果が分かる方法です。レーダーチャートが出るようにしてあります。膨らみが大きければいいわけです。これは去年の2学期のものです。こちら側の膨らみが少し小さいのでこういうところで指導改善の部分があるということで、教科によってはすぐにカリキュラム・マネジメントができますので、迅速な指導改善が行えるのです。

先ほど北大の入試の説明中で先生方が生徒をよく見ていただきたいというところがありました。もちろん教師は生徒をよく見ているのですが、むしろ、どういう力のある生徒を育てるのが重要と考えています。それ故に私たちは「チーム・学校」として、先生方に振り返り手法をいろいろレクチャーしました。学期の振り返りだとか、先ほどの授業評価の振り返りもそうですが、次の改善に向けていく第一歩として小さな振り返りをやることからスタートすることを大切にしています。

その具体的な取組の中で全職員で2年目の重点目標を作りました。それを受けて2年目の半年間

ぐらいかかって、「学校教育目標」を作っていたのです。いわゆる校訓はあったのですが、「チーム・学校」としてどういう生徒を育てたいのかと。当時は「〇〇力」をたくさん挙げられていた全国の学校がありましたが、先生方は文章にしたいということで、それぞれの教科や学年団から、どのような生徒を育てるかという言葉を取り出しました。それが「すべては光る個性の輝き」という創立90周年のときにできた校訓に、3年間で「育てたい生徒像」を加えて出来上がったのです。

先ほどの白井様の話でもありましたが、横浜国立大学の高木展郎先生の指導を受けまして、さらにグランドデザインというものを先生方に作っていただきました。岡山県では今年度から全ての学校でこういう形でグランドデザインを出すことになりまして、林野高校では早々に問題なくやっています。これは昨年度版ですが、今年版はこれがいづらか先生方によって修正がかかっています。

最後です。全体のグランドデザインができた後に教科のグランドデザインも昨年度出来上がりました。これはどのように作っていいのかというところでかなり苦労しました。ちょうど学習指導要領が告示された後で「見方・考え方」のところがきちんと明記されました。「見方・考え方」から「資質・能力」ベースでどのようにすればいいかからできあがったものです。これは国語科のグランドデザインです。先ほど申しましたように小さなカリキュラム・マネジメントを駆使しながらそれぞれの生徒を育成していくが中心です。これは学年です。学年がこのようにしたいというところで、学年のグランドデザインを作り、生徒の育成を進めていくのです。さらに3年間の調査研究事業で少し無理をしているいろいろやってみようということで、ベネッセのGPSもやってみました。いわゆる批判的思考力です。汎用的な思考力をどのように見るのかということもやってみて、スコアを出しています。昨年度はまだ結論は出ませんでした。今年はどうするか結論は出ると思っています。おそらく2年やってみて、どのような生徒に力が付いているのかということが見えてくるだろうと

思っています。

3年間の終わりに先生方に対して3年間を振り返ってどうだったかという調査もしました。皆さんはグランドデザインを理解していますし、それで実践をしているのですが、それが授業改善で生徒がどう変容したかがまだ明確な実感がないようです。生徒にどういう力を育てていますか、という問いになると苦しい部分があると思っています。これは4点評価で調査し、上の2点を足したものを肯定とし、下の2点が否定としています。よく林野高校はこうやっているという形でお話をさせていただくことが多々ありますが、実際にPDCAはどうなったのかという点ではこうなります。実はPDCAをどう回すかということでお尋ねがあります。「先生、PDCAを回すとはどうするのですか」という具合です。取りあえず3年間のPDCAでこのようになったように感じます。実際には最良と考えたPDCAは回っていないと思います。AからDに戻ったりとか、この辺りを行ったり来たりするのではないかとこのところがやはり先生方の中から出てきました。ですので、おそらく最初はPDCAの構築の部分になりますとここにおられる先生方は悩まれると思いますけれども、最終的にそれぞれの学校が最良と思うPDCAになれば、という気持ちからスタートされればいいと思います。

管理職はどうするかという点では、ここだと思っています。Pを設定するときに評価とのひも付けをやっていくかを考えておくことが、最終的にうまく回っていく部分だろうと思います。林野高校は小さな学校ですから、生徒一人一人の振り返りは年に3回ぐらいやっていますのでデータの共有もカリキュラムマネジメントもうまく出来つつあるのだと思います。

これは昨年度末の総括ワークショップの様子です。こういうことを先生方は普通にやってくれます。KPT法で発表しているところです。これが終わって次年度のことがらが出来上がっていくことが普通になったようです。

さて、課題もありますが、特に最後に申し上げたい話です。これは先生方のことではありません。それでも先生方の中で自分たちが育てたい生徒がうまくいっているかどうかというところが不安な部分をたくさん抱えておられました。当時、たまたま総合的学習の時間が学びにどのような足場掛けをしているかということで調査に入っていたいる産業能率大学の荒木淳子先生に調査の中から見えてきたものについて研修会を開き、説明をしていただきました。総合的学習の時間においてラーニング・ブリッジングの研究調査の中での生徒のインタビュー調査のデータを頂いたものです。MDPという本校の総合的な学習の時間が切り口ですが、インタビュー調査に関わってくれた生徒の発言内容から、リーダーシップや学習観の変容、仲間との学び合いや自発的に関わる楽しさ、新しい気付きというところも明確に見えてきたことを指摘していただきました。つまり、われわれがやっていることをどのように評価して、われわれ自身が学校経営を進めていくところで自信を持っていくためにアンケート以外にインタビューのようなこういうやり方もありますと先生方に知ってもらいました。

最後に今日の話にたくさん出てきていますけれども、先生方によく言った話としては形成的評価を繰り返しながら総括的評価をしていきましようと言いました。そこは上手に道筋を誤らずに生徒たちが力を付け、最終的には進路に向かってどう進めていくかという部分をお互いに対話をしつつPDCAに落とし込めていければ林野高校もまだまだ良くなるのではないかと考えていたからです。

到達点と課題です。全てがオクケーになっているわけではありません。私が勤務した3年間で、例えば国公立大学の合格者の目標値が40人としていましたが、40人に届いていないという現実もあります。しかし、先ほどお話がありましたような北大の入試をされるということになれば林野高校からでもチャレンジできると思っています。毎年北海道大学を希望する学生がいます。なぜかとい

うと、理系の括りの入試などで北大に行ってみたく、さらに修学旅行で北海道にやってくるので、雰囲気が良かったりして北海道で勉強してみたいと言う生徒が何人もいます。そういう意味ではこの入試改革が林野高校にもいい影響を及ぼしていただければいいのではないかと思います。私の話は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

(司会)

どうもありがとうございます。それでは、ここで再度休憩を取らせていただきたいと思います。再開は15時50分です。先ほど来からお知らせをさせていただいていますが、質問票にご記入いただきまして、後ろにいるスタッフが回収に伺いますのでよろしくお願いします。それでは、15時50分から再開します。

〈休 憩〉



アセスメントとカリキュラム・マネジメントによる林野高等学校の改革

～汎用的な資質・能力の育成と評価～


岡山県立林野高等学校
前校長 三浦 隆 志

E-mail: takashi.miura1958@gmail.com



本日の内容

- 1,岡山県立林野高等学校とは
- 2,何が課題であったのか
- 3,「学習改善のための調査研究事業」の取組
- 4,到達点と今後への課題



1,岡山県立林野高等学校とは①

岡山県立林野高等学校とは
創立111年目の単位制の普通科高校
津山市を中心とする美作学区の最も東にある
1学年定員: 35人の4クラス、140人

	男子	女子	計
1年	48	68	116
2年	64	71	135
3年	56	55	111

<進路状況>

	H31.3	H30.3
国立大学	14	21
私立大学	55	66
公立短期大学	0	0
私立短期大学	9	5
専門学校	37	31
就職	6	11
その他	5	0

主な進学先
岡山大学、京都教育大学、鳥取大学、島根大学、山口大学、静岡大学、香川大学、徳島大学、高知大学、鹿児島大学、岡山県立大学、中央大学、明治大学、早稲田大学、関西大学、立命館大学、京都産業大学、ND清心女子大学など



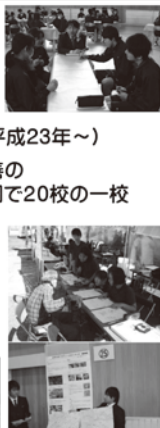
1,岡山県立林野高等学校とは②

【特徴的なカリキュラムと授業改善】
生徒の進路に合わせた5類型の教育プログラムを用意
「みなさか学」や「作家の時間」などの学校設定教科・科目

現行の学習指導要領を踏まえた授業改善や評価の研究(平成23年～)
文部科学省、「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」の指定(平成28年～平成30年)全国で20校の1校

【総合的な学習の時間(My Dream Project)】
地域をフィールドにした課題解決学習
現在はver2(平成23年～)
一「テアイ堀」「むかし倉敷ふれあい祭り」「実践報告会」などの特徴的なプログラムで実践

平成30年1月11日 **キャリア教育に関する 文部大臣表彰を受賞**



1,岡山県立林野高等学校とは③

【グローバル人材の養成】

- ローカルとグローバルな観点からの人材育成
- H22～「総合的な学習の時間」(マインドリームプロジェクト)による探究型の地域課題解決学習の推進
- H25.12 コネスコスクールに認定
 - それまでのESD活動が認められる。H26にコネスコスクール世界大会高校生フォーラム(岡山)が開催
 - ～H28 地域のNPOと協働して、インターナショナル タイ キャンプを開催
- 海外修学旅行の実施
 - H24.6 初の海外修学旅行(韓国、ソウル市紫雲高等学校と交流)
 - H26.6 初の台湾修学旅行(台湾、台北市立内湖高級工業職業学校と交流)
 - H28.6とH29.6 台湾の台北市 私立台北中興高級中学校と交流
- 海外の学校や諸機関等との交流事業
 - H28.10 対日理解推進交流プログラム2016で、80名の中国の高校生が来校
 - H29.11 外務省幹部職員による国際理解講座(本校)
 - H30.11 トイツ1等書記官によるEU理解講座(本校)
 - H30.12.10～ 対日理解推進交流プログラム2018 ASEAN派遣で、16名をタイに派遣。
- 姉妹校提携と交流の取組
 - H29.10 校長が国立台南第二高級中学と台南市立大湾高級中学を訪問
 - H30.2 国立台南第二高級中学と台南市立大湾高級中学との包括連携協定を締結(於:台南市)
 - H30.7 国立台南第二高級中学と台南市立大湾高級中学に生徒を派遣
 - H30.12.18 国立台南第二高級中学と台南市立大湾高級中学の生徒が教育旅行で本校を訪問・交流
 - R元年.6 修学旅行で、国立台南第二高級中学と台南市立大湾高級中学を訪問・交流

【ICT機器の利活用】

- H22 全クラスに単焦点プロジェクターを設置
- H28.6 GoogleからChromebookの実証研究を打診される(一環境整備に着手)
- H29.3～ Chromebookの実証研究を開始(Google・NTTドコモ・林野高等学校による)
- H29.10～ GoogleのChromebookを教育活動全般に導入～H31.4～3学年揃って一人一台が完成

2,何が課題であったのか

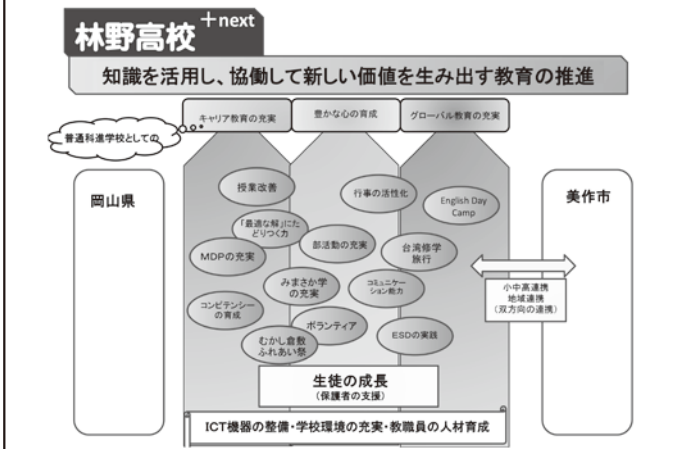
	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
定員	200	200	200	200	200	200	160	160	160	160	160
入学	200	200	200	196	196	200	152	160	137	137	160
%	100	100	100	98.0	98.0	100	95.0	100	85.6	85.6	100

	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
定員	160	160	160	160	140	140	140	140	140	140	140	140
入学	150	160	130	113	96	126	124	136	134	112	138	116
%	93.8	100	81.3	70.6	68.6	90.0	88.6	97.1	95.7	80.0	98.6	0.83

→ 学校改革start
→ 三浦の在職期間

→2009年までは、定員の充足率は周期的。
→2010年以降、定員を一度も充足していない。

2016年7月、県に提出したポンチ絵



普通科進学校なので、進路指導でのアセスメントをあれこれとやっていますが……

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
高1	入学式	定期	模k3	アセス	定期	模k3	定期	模k3	定期	模k3	アセス	
高2		定期	模k3	アセス	定期	模k5	定期	模k5	定期	模k5	模M5	アセス
高3		定期	模k5	定期	模M5	模k5	出前定期	模M5	定期	共通テスト	個別入試	卒業式
大1	入学											

出典：昨年、9月に今年度以降のアセスメントをどうするかを検討した際の資料から。

2.何が課題であったのか

- ・ 少子高齢化による生徒の減少
→ 一定員が充足しない状況
- ・ 学区制度の改変の影響(小学区から中学区へ)
→ 地域内のより魅力のある学校へ流出
- ・ 授業改善や先進的な取組はしているけども……
→ MDPや学校設定教科や科目がある
- ・ アセスメントも導入して調査はしているけども……
→ アセスメントの意味の再構築？

これまでの取組を発展させ、林野高校の3年間で、生徒にどのような力を育成するかを明らかにして、授業を中心とした教育活動全体を改善しつつ、さらに学校を社会に「開く」取組をする

文部科学省による「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」(H28～H30)を梃子に

3.「学習改善のための調査研究事業」の取組①

本年度から実施する「高校生のための学びの基礎診断」は、高等学校教育の質保証を目指した施策の一つ。

<調査研究事業の目的>
高大接続改革を推進するため、「基礎学力の着実な定着」とともに、「高校生の学習意欲の喚起」を目指し、「高校生のための学びの基礎診断」の導入検討等に取り組む

- ✓ 指導体制の在り方の検討や教材開発等
- ✓ テスト手法等に関する仕組みや実施方法等を研究することをもって、高等学校現場におけるPDCAサイクルの確立を目指す

テスト導入のための調査研究と捉えずに、これまでの林野高等学校の課題克服と新たな未来を切り開くために取り組む

3.「学習改善のための調査研究事業」の取組①

	生徒が主体的に学ぶ力を育成する	資質・能力を育成する学校の仕組み作り(新学習指導要領への道筋)
H28年度	実態の生徒の把握 → 課題 「主体的な学びに乏しい」 「学び続ける意欲が乏しい」 → 授業評価を復活させる → 「OPPAシート」の導入普及	「チーム学校」のスタート → 振り返りをWorkShopで 1学期末：KPT法を用いて全員で振り返り 3学期：新1年のLHRを企画する 2017年度の重点目標を産み出す → 「教職員」全員での取組へ
H29年度	教師の「発問力」の向上 → 「ICEモデル」の研究・導入 → Chromebookの導入	「チーム学校」の展開 2学期：「育てたい生徒像」の策定 ミドルリーダーによるWorkShop 「教職員」全員でのWorkShop 3学期末：グラントデザインを策定
H30年度	研究テーマ 「生徒が主体的に深く学ぶ力を育成するために 教師の発問や評価等について研究する。」 → 3年間で育てたい資質・能力を明らかにする。→ 資質・能力ベースで年間指導計画の作成。 → 教師の「発問力」の研究は継続。→ ICT機器の活用でさらに幅を広げる。どの教科も → 評価方法や「指導と評価の一体化」等について研究する。 → カリキュラムマネジメントを通じて、教育活動がよりよい方向へ向かう。	

ICEモデルとは

ICEモデルで考えると

→教師の「問い」の力を鍛える

	Ideas	Connections	Extensions
「問い」のねらい	知識・理解の定着	知識・理解等の深化	知識・理解等の統合的な活用
内容	何を意味しているか 必要性は何か	どのような視点から ものごとを見るか	どのような価値や資産を 創り出すか
目的	精緻化 他者への説明	理解の深化 自己内対話や他者との 体験の共有・協働	実効化と創造 提案、創作、貢献活動

Chromebookの導入

Chromebookとは？

Google社HPより

学習用にデザインされ、教室で利用するように作成

- 非常に軽く、丈夫なノートブックで生徒用に設計
- 電源を入れてから10秒以内で立ち上がり、約9時間のバッテリー稼働時間
- シンプルなデザイン、平準な価格、高度なセキュリティ、共有可能な設計



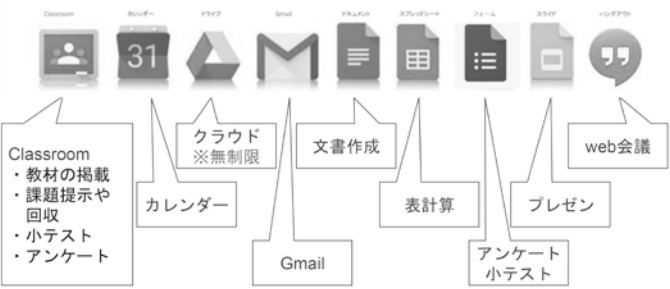
Google for Education

Confidential Do not distribute

ChromeOS

14

G Suite for Education



15

一枚ポートフォリオ評価について



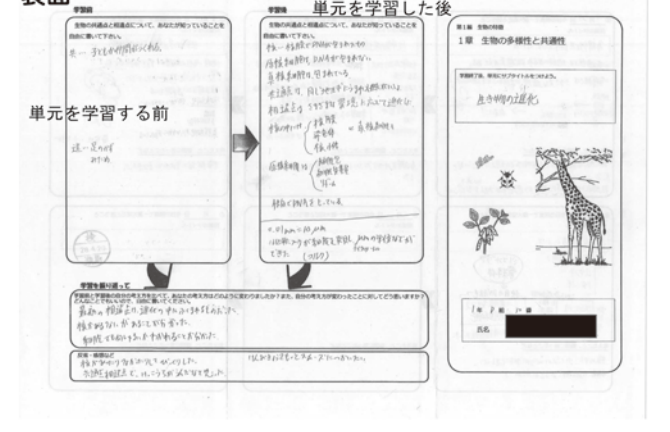
山梨大学副学長の堀哲夫先生の著書です。

堀先生は、小学校の理科の教科指導を研究されている方です。この著書では、高校から小学校まで汎用的な評価について書かれています。

OPPAとは学習者が一枚の用紙の中に、授業前・中・後の学習履歴として授業の成果を記録し、その全体を学習者自身に自己評価させる方法です。たった一枚の用紙を使って、必要最小限の情報を最大限に活用するところがポイントです。

一枚ポートフォリオ評価について

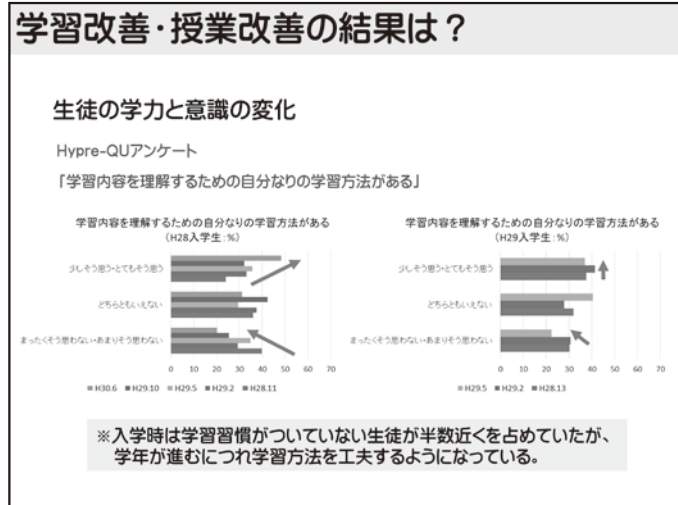
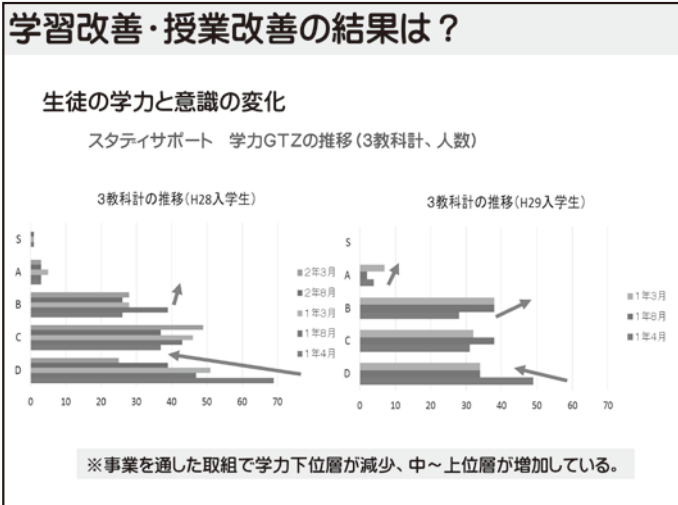
表面



一枚ポートフォリオ評価について

裏面





授業評価アンケート

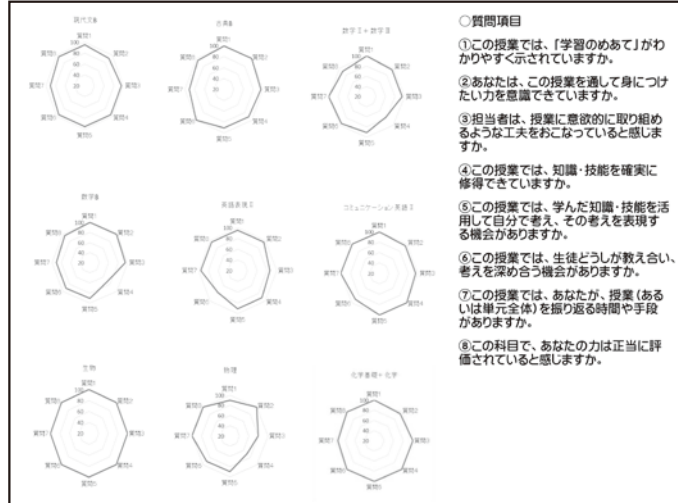
※授業評価アンケート(生徒対象)

○実施時期と実施方法
毎年7月上旬と12月上旬。G Suiteアプリ「フォーム」で回答(←3年前はOCRカード)

○質問項目

- この授業では、「学習のめあて」がわかりやすく示されていますか。
- あなたは、この授業を通して身につけたい力を意識できていますか。
- 担当者は、授業に意欲的に取り組めるような工夫をおこなっていると感じますか。
- この授業では、知識・技能を確実に修得できていますか。
- この授業では、学んだ知識・技能を活用して自分で考え、その考えを表現する機会がありますか。
- この授業では、生徒どうしが教え合い、考えを深め合う機会がありますか。
- この授業では、あなたが、授業(あるいは単元全体)を振り返る時間や手段がありますか。
- この科目で、あなたの力は正当に評価されていると感じますか。

→2018年度から、教科のカリキュラムマネジメントを促す問も実施



3、「学習改善のための 調査研究事業」の取組②

	生徒が主体的に学ぶ力を育成する	資質・能力を育成する学校の仕組み作り(新学習指導要領への道筋)
H28年度	実態の生徒の把握 →課題 「主体的な学びに乏しい」 「学び続ける意欲が乏しい」 →授業評価を復活させる →「OPPAシート」の導入普及	「チーム学校」のスタート →振り返りをWorkShopで 1学期末：KPT法を用いて全員で振り返り 3学期末：新1年のLHRを企画する 2017年度の重点目標を産み出す →「教職員」全員での取組へ
H29年度	教師の「発問力」の向上 →「ICEモデル」の研究・導入 →Chromebookの導入	「チーム学校」の展開 2学期末：「育てたい生徒像」の策定 ミドルリーダーによるWorkShop 「教職員」全員でのWorkShop 3学期末：グラントデザインを策定
H30年度	研究テーマ 「生徒が主体的に深く学ぶ力を育成するために 教師の発問や評価等について研究する。」 →3年間で育てたい資質・能力を明らかにする。→資質・能力ベースで年間指導計画の作成。 →教師の「発問力」の研究は継続。→ICT機器の活用でさらに幅を広げる。どの教科も →評価方法や「指導と評価の一体化」等について研究する。 →カリキュラムマネジメントを通じて、教育活動がよりよい方向へ向かう。	

平成29年10月に策定した「育てたい生徒像」

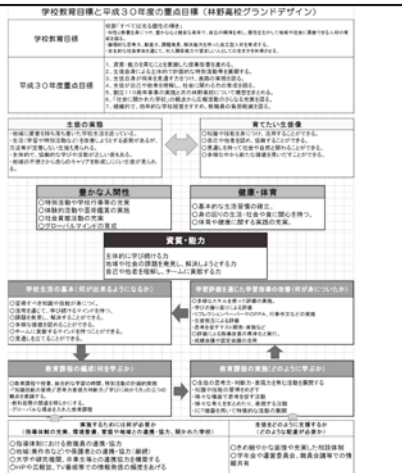
「育てたい生徒像」
～「どんな生徒を育てたいのか」という問いに対する答え

The Next Stage of Hayashino HS

校訓：すべては光る個性の輝き

- 知識や技能を身につけ、活用することができる。
- 自己や他者を認め、協働することができる。
- 見通しをもって社会や自然と係わることができる。
- 多様な中から新たな価値を見出すことができる。

平成30年度版 林野高等学校 グランドデザイン



http://www.hayasino.okayama-c.ed.jp/wordpress/wp-content/uploads/2018/05/2018林野高校グランドデザイン.pdf

3、「学習改善のための 調査研究事業」の取組③

	生徒が主体的に学力を育成する	資質・能力を育成する学校の仕組み作り (新学習指導要領への道筋)
H28年度	実態の生徒の把握 一課題 「主体的な学びに乏しい」 「学び続ける意欲が乏しい」 一授業評価を復活させる 一「OPPAシート」の導入普及	「チーム学校」のスタート 一振り返りをWorkShopで 1学期末：KPT法を用いて全員で振り返り 3学期末：新1年のLHRを企画する 2017年度の重点目標を産み出す 一「教職員」全員での取組へ
H29年度	教師の「発問力」の向上 一「ICEモデル」の研究・導入 一Chromebookの導入	「チーム学校」の展開 2学期：「育てたい生徒像」の策定 ミドルリーダーによるWorkShop 「教職員」全員でのWorkShop 3学期末：グランドデザインを策定
H30年度	研究テーマ 「生徒が主体的に深く学力を育成するために 教師の発問や評価等について研究する。」 一3年間で育てたい資質・能力を明らかにする。→資質・能力ベースで年間指導計画の作成。 一教師の「発問力」の研究は継続。→ICT機器の活用でさらに幅を広げる。どの教科も一評価方法や「指導と評価の一体化」等について研究する。 一カリキュラムマネジメントを潤して、教育活動がよりよい方向へ向かう。	

【国語科のグランドデザイン】

【国語科で育成したい資質・能力のグランドデザイン】

何が出来るようになるか ○ 読む姿勢 に示された資質・能力 ○論理や情報に訴えながら自己を込め入ることができる。 ○自分の考えを適切に表現できる言語感覚を身につけることができる。	何が身に付いたか ○ 各教科の評価(形成的評価) ○論理に基づいた読解力のある文章(企画書や依頼文等の実用文を含む)を著述できるようになる。 ○自分の立場や考えを明確にして、相手の心を動かす文章(プレゼンテーション)ができるようになる。 ○協働的場面での「個人の動き」のメタ認知ができるようになる。
何を学ぶか ○ 単元計画と年間指導計画 1年次：現代の国語、書翰文化 (1) 日常生活に必要な読解、将来の学術的学習に必要な基礎的知識の習得と活用 (2) 実用的文章、論議的文章、文学的文章の解釈と、それに基づいた自分の考えの構築 (3) SDGs及び多様な言語文化に対する興味関心の育成 2・3年次：論議国語、文学国語、古典研究、国語表現(演)	どのように学ぶか ○ 授業の実施形態、言語活動の計画 ○「演習」の場を積極的に設定する ○課題研究を基とした小グループに異動課題を作る ○OPPA等の振り返りシート、「ドラゴン」上のももを含む活用 ○単元別にレポートを作成、企画書・依頼文等の実用 ○思考・判断・表現に關して、相手に応じた多様な課題を設定できるように課題を設計する。 ・定期考査でパフォーマンス課題を予告した上で出題する。 ・ALの異なるVerip

実施するために何が必要か ○**評価支援体制** 他教科との連携と協働など
 ・研究の研鑽(研究内容の共有、相互授業参観等)
 ・教科科員会での密な内容の共有

【1年次のグランドデザイン】

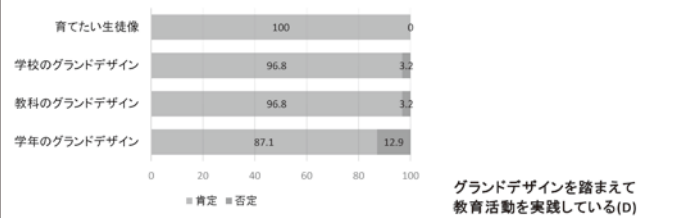
【1年次で育成したい資質・能力のグランドデザイン】

何が出来るようになるか ○ 資質・能力 ○自己またはクラス等の課題を発見し、解決に向けて主体的に行動することができる。そのために、自ら情報を収集し、自らの言葉で課題や解決案、振り返りなどを表現することができる。 ○自己と他者を認めることができ、協働的に学び続けることができる。	何が身に付いたか ○ 各教科の評価(形成的評価) ○学校行事の際に実施するPDCAサイクルに基づく振り返りシートの取組が行事の前後でどのように変化したが、または1年間を通してどのように変化したかを評価するために、生徒の実態を見つめるグループワークを作成する。 ○学校行事後に実施するアンケート調査の「自己を肯定する」、「他者を肯定する」等の項目の肯定的割合の数値が1年間を通して上昇しているか。
何を学ぶか ○ 各教科等の年間指導計画 ○6月球技大会 ○7月進路セミナー、進路ガイダンス ○9月あがりん祭 ○3月球技大会 ○球技大会、あがりん祭前後のLHR活動	どのように学ぶか ○ 各教科等の授業の実施 ○年間指導計画に合わせた学校行事の際に、PDCAサイクルに基づく「振り返りシートと記録」を詳細に採集して実施する。また、その振り返りの内容をグループまたはクラスで共有し、メタ認知ができるようにする。記録については、Chrome Bookを利用することで記録の蓄積を行う。 ○学校行事前後のLHR活動を生徒主体で実施させる。

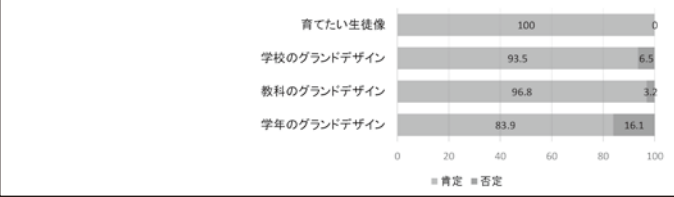
実施するために何が必要か ○**評価支援体制** 本校の領域との連携と協働など
 ○1年次におけるグランドデザインの共有研修と統一的な指導
 ○年間指導計画に合わせた学校行事以外で、主体的・協働的な指導、活用ができる多くの場の提供
 ○O suite (Chromebook) による活動記録蓄積のための入力フォームの開発
 ○3年間を見通した系統的な指導体制の構築

この3年間で振り返ってみると

グランドデザインを理解している(P)

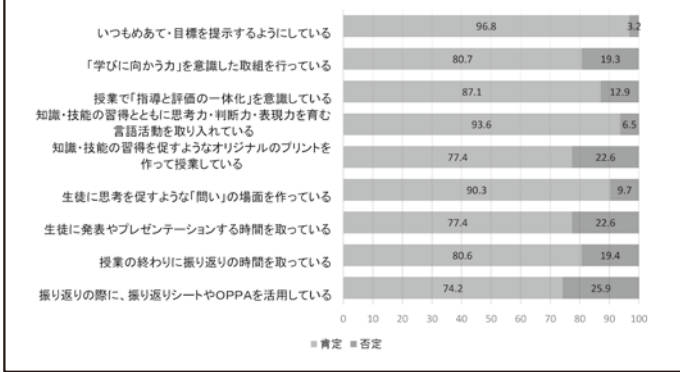


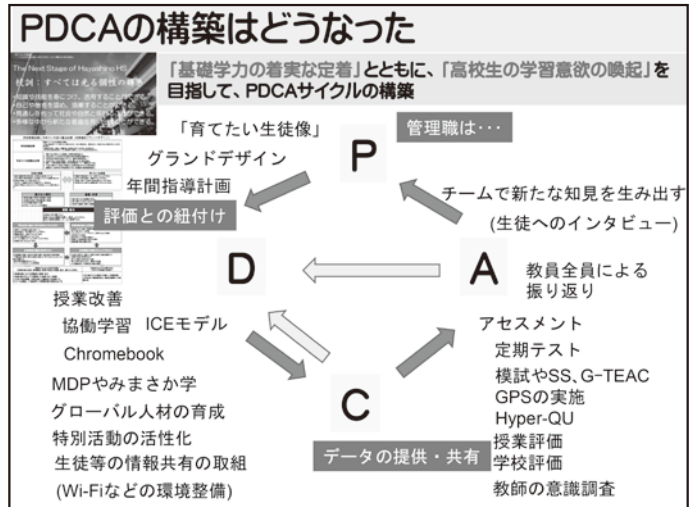
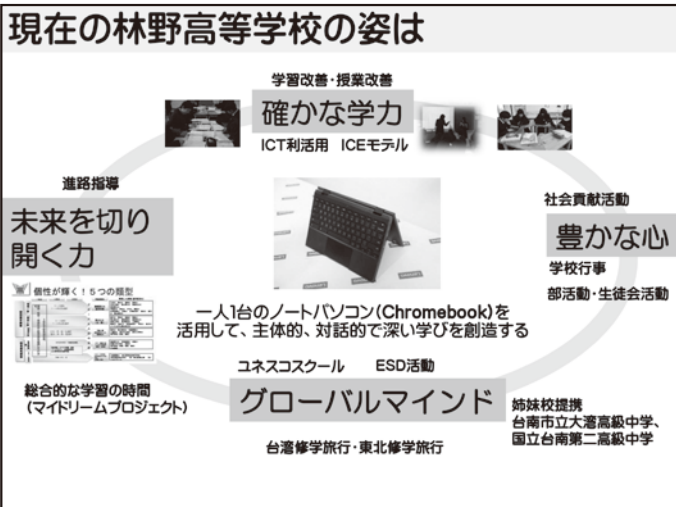
グランドデザインを踏まえて教育活動を実践している(D)



この3年間で振り返ってみると

グランドデザインを実現するための授業(A)





- ### 4. 到達点と今後への課題
- ①学校全体の取組によって「育てたい生徒像」や「学校グランドデザイン」「教科・学年のグランドデザイン」が策定され、教職員の意識は揃いつつある。つまり、生徒の資質・能力の育成にどのように取り組むかという意識が醸成してきた。
 - ②少子高齢化による生徒の減少はさらに厳しさが増すと考えられるが、成果は着実に現れつつある。
 - ③教育活動の改善には今後もカリキュラム・マネジメントが必要。特に、生徒に基礎学力の定着をどう「実感」させるか、「生徒の変容」をどう測定するかなど課題は多い。
 - ④指導と評価の一体化を実現していくうえで、評価を意識した指導計画が必要。「何のための評価であるのか」「誰のための評価であるのか」の視点が重要。
 - ⑤「高校生のための学びの基礎診断」は、新しいテストの導入に矮小化するのではなく、高大接続の観点から学習改善・授業改善を推進し、学校全体の改善を図る必要がある。

ご静聴ありがとうございました。

2019年6月18日(火)
 北海道大学入試改革フォーラム2019
 アセスメントとカリキュラム・マネジメントによる
 林野高等学校の改革
 ～汎用的な資質・能力の育成と評価～
 於)北海道大学学術交流会館 2階講堂

岡山県立林野高等学校 前校長 三浦 隆志
 takashi.miura1958@gmail.com